

エウカリスチア — ミサを生きる —

小田武彦

1. 導入

今回テーマとなっているエウカリスチアというのは、「最後の晩餐におけるイエスの行為に基づいた聖なる食事」¹のことです。日本語では「聖体」とか「感謝の祭儀」と訳されることが多いのですが、パンの形をしたキリストの体だけを意味しているのでは決してなく、「イエス自身との一致によって、御子キリストの死と復活を通して、聖霊において、父なる神が人を神のいのちと愛に参与させる救いの出来事」²でもあるのです。非常にダイナミックで重要な意味内容をもっており、エウカリスチアなしではキリスト教会は存在せず、エウカリスチアと切り離されたキリスト教信仰もまったく考えられません³。だからこそ第2バチカン公会議はエウカリスチアを「キリスト教生活全体の泉であり頂点である」⁴と定義しているのです。

非常に限られた時間ではありますが、この研修で、エウカリスチアという言葉が指し示している深い意味内容をご理解いただき、ここにお集まりになっているおひとりお一人の人生にとっても、エウカリスチアが抜き差しならない重要な「出来事」であり、生きる活力の源であると同時に生きる目的そのものであることを再確認していただけたら幸いです。

2. エウカリスチア：「感謝の祭儀」「感謝の祈り（奉献文）」「聖体」

ギリシア語 εὐχαριστία（エウカリスチア）の直訳は「感謝」です。「恵み」や「たまもの」といった意味の χάρις を語根とする言葉で、いただいた恩恵に対する応答としての感謝を意味しています。しかしキリスト教会が大切にしているエウカリスチアは、「感謝」という言葉以上の意味があります。

キリスト教会にとってエウカリスチアとは、イエスのおっしゃったこと（言葉）となさったこと（行い）、さらにはイエスの死と復活を思い起こし、それらを心に刻み、記念し、イエスと自分たちが一つに結ばれ、イエスによって生かされていることを体験する「秘跡」です。『カトリック教会のカテキズム』はこの秘跡がエウカリスチアと呼ばれるだけでなく、伝統的に「主の晩餐」、「パンを裂くこと」、「集い（シュナクシス）」、「聖なるいけにえ」、「賛美のいけにえ」、「霊的いけにえ」、「清い聖なるささげもの」、「神聖なる典礼」、「聖なる神秘の祝祭」、「いと聖なる秘跡」、「コ

¹ J. F. ホワイト『キリスト教の礼拝』（日本基督教団出版局、2000年）p.323。

² P.ネメシエギ「エウカリスチア」新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典』（平凡社、1996年）第1巻p.749。

³ 「諸秘跡も、すべての教会的役務も使徒職の仕事も、すべてはエウカリスチアと結ばれ、これに秩序づけられている」（第2バチカン公会議『司祭の役務と生活に関する教令』5）。「エウカリスチアはキリスト教礼拝におけるもっとも特徴的な構成要素である。それはまたキリスト者の間における礼拝形式としてもっとも広範に用いられているものであって、日ごとにあるいは週ごとに、世界中の何千という数に及ぶ信仰共同体および会衆によって行われているものである」（『キリスト教の礼拝』p.323）。

⁴ 第2バチカン公会議『教会憲章』11。礼部聖省『聖体祭儀指針』6参照。

ムニオ（交わり）」、「天からのパン」、「不死の妙薬」、「旅路の糧」、そして一般的に「ミサ聖祭」と呼ばれるようになってきたことを解説しています。このダイナミックで重大な意味内容をもったエウカリスチアという言葉、自分たちの言語の単語に置き換えてしまうと誤解が生じるということで、ラテン語では *eucharistia*、イタリア語では *eucaristia*、スペイン語では *eucaristía*、ドイツ語では *eucharistie*、フランス語では *eucharistie*、英語では *eucharist* と、発音は微妙に違っても綴り字をほとんど変えないで表記してきています。日本でもキリスト教が伝えられた 16 世紀頃は「エウカリスチア」と表記されていました⁵。

ところが明治以降の再宣教の中で、原語の発音をカタカナで表記することが嫌われたからか、中国で使用されていた漢字表記が持ち込まれたかして、エウカリスチアという一つの単語が、「感謝の祭儀」「感謝の祈り（奉献文）」「聖体」という三つの言葉に訳し分けられるようになってしまいました⁶。

たとえば教皇ヨハネ・パウロ二世回勅 *Ecclesia de Eucharistia* の日本語タイトルは『教会にいのちを与える聖体』となっています⁷。本文の中では、「聖体」という訳語が最も多くて 266 回、74 回が「感謝の祭儀」、そして 1 回ずつ「感謝の祈り（奉献文）」と「エウカリスチア」と訳されています。訳者は第一項冒頭で「教会が聖体（エウカリスチア）に生かされたものであるということ」、第二項では「イエスご自身が最初の感謝の祭儀（エウカリスチア）を行ったとされる高間（二階の広間）で感謝の祭儀を行うことができました」と、それぞれの言葉を最初に使った場合にカッコつきでエウカリスチアという言葉を入し、もともとは同じ言葉を文脈によって訳し分けたことを示してはいます。しかしどれだけの人が、「感謝の祭儀」や「聖体」、「感謝の祈り（奉献文）」という、一見まったく異なった言葉が、原文ではすべて同じエウカリスチアであるということ意識し続けることができるでしょうか。異なった単語に訳し分けてしまっているために、エウカリスチアが本来もっている意味内容が伝わらず、一面的で狭い理解か、ダイナミックな側面を切り落とした理解に陥ってしまっていると言えるのではないのでしょうか。

3. エウカリスチア：イエスの「最後の晩餐」の記念⁸

エウカリスチアは「イエスの最後の別れの食事の記念」です。観念的に作りあげられたもので

⁵ *eucaristía* 項、桑名一博ほか『西和中辞典』（小学館、1990 年）参照。

⁶ トリエント公会議は七つの秘跡の中の一つの名称としてエウカリスチアを用いているが、その内容はパンとぶどう酒の形態のもとにおけるキリストの現存に限られていた。*corpus sacrum* の訳語が「聖体」ではあるが、エウカリスチアを *corpus sacrum* と同義語のように受け止めたトリエント公会議の影響下で、エウカリスチアもほとんどの場合「聖体」と訳されてきた。エウカリスチアを「感謝の祭儀」や「感謝の祈り（奉献文）」と訳すようになったのは、古代教会におけるエウカリスチア理解を再認識した第 2 バチカン公会議以降のようである。E. ラゲ『聖體の犠牲』（天使院、第 3 版、1931 年）および土屋吉正『典礼の刷新』（オリエンズ宗教研究所、第 3 刷、1996 年）p.308 参照。

⁷ 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『教会にいのちを与える聖体』（カトリック中央協議会、2003 年）。

⁸ 3 項は、2005 年 8 月 30 日に神戸市立神戸セミナーハウスで行われた大阪教区宣教司牧者研修会における「ミサと聖体の秘跡—キリストの形見」というテーマの岩島忠彦師講話を要約筆記したものをふくらませたものである。

はなく、はっきりとした時間、空間、歴史の一点にその出発点があります。まず、イエスが裏切られて殺される前夜、弟子たちとともに行った最後の晩餐に関する新約聖書の記録からエウカリスチアの歴史的原点を確認しましょう。

コリントの信徒への手紙 一 11章 23-26節：わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

ルカによる福音書 22章 15-34節：イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれはいけなさい。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者ようになり、上に立つ人は、仕える者ようになりなさい。(略)「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。」するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

イエスは、自分にとっては最後となる過越祭を祝うためにエルサレムに上った際、12弟子と一緒に別れの晩餐を行いました。この歴史的原点となった夜のことを新共同訳聖書(一コリ)は「引き渡される夜」と訳していますが、ギリシア語 $\pi \alpha \rho \epsilon \delta \iota \delta \omicron \tau \omicron$ は直訳すると「彼が裏切ら

れた夜」となります。

「最後の晩餐」と聞くと、イエスと最も親しかった弟子たちが和気あいあいと食事していたのだろうと勝手に思いこんでしまいます。ところが聖書の記録によると、最後の晩餐の食事中、弟子たちはいったい誰が一番偉いのかと言い争いをしています。さらにイエスは、弟子たちの中にイエスを根本的に否定している者がいること、我が身可愛さに弟子たちが自分を捨てて逃げ出し、ペトロにいたってはイエスを知らないと言うだろうと語っています。つまりイエスは、弟子たちの頼りなさというやなものをしっかりと見据えておられたのです。そして、その頼りなさの奥にある、いわば闇の力とでもいいでしょうか、悪の力、人のもろさ、この世の力のすさまじさといったものを意識しておられたのです。

最後の晩。イエスは、自分がなそうとしてきたことをほとんど終えようとしているにもかかわらず、いわゆる世の力というものがしつこく存在し続けているという事実をそのまま受け止めておられたようです。イエスは最後の晩餐において、闇の力やしがらみといったものにとらわれている頼りない弟子たちに、自分自身のすべてを与えられます。そのような弟子たちに最も大切な事柄を託されたのです。

ヨハネ福音書の13章には、「過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」と記されています。ここに決死の心が表れています。イエスの言葉を聞き、イエスの行為を目の当たりにしてきたにもかかわらず、まだイエスのことを理解しきれないでいる弟子たちを徹底して愛され、「この上なく愛し抜かれた」のです。

「ルカによる福音書」の記録を中心に確認していきましょう。

「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」（ルカ 22：15）。まさに決死の覚悟の表明です。自分の使命を全うするためには死をもいとわないが、いよいよその時がやってきている。生命を投げ出したところでだけ成立するような事柄を私は今しようとしているのだ、ということでしょう。最後の晩餐とは、イエスが全生命をかけて弟子たちに最後の遺言を託すための食事、イエスにとってこれが最後だと明確に意識されていた食事なのです。この世に残される弟子たちを愛し、心からの配慮で「あなたがたと共にこの過越の食事をしたい」とイエスは切に願われたのです。

この食事はイエスにとって特別でした。「切に願っていた」という表現から、その食事がイエスにとって非常に大切な食事だったことがわかります。それは、イエスの使命にとって大切だただけではなく、弟子たちにとっても大切なもので、人類全体にとっても特別な重要性を帯びた食事だったのです。

「言うておくが」という言葉で、これから言うことは非常に重要なことだと注意を促します。「神の国で過越が成し遂げられるまで」（ルカ 22：16）、死を目前にして、神の国が成就することに対する強

い信頼に満ちた言葉です。自分が伝えてきた「神の国」は、目前に迫る死によって確実なものとなるという確信が表れた言葉です。

それと同時にイエスは自分の死をはっきりと意識し、「わたしは決してこの過越の食事をとることはない」、つまりこの過越の食事は二度とない特別なものであると宣言されます。神の命、神の恵みが、この食事にすべてぶち込まれている。だから、神の国が完成するまで、完成に向かう途上にあるあらゆる世代の人々にとって、この晩餐は、いつも神の国のしるしとして行われる食事となるのです。

ただ一度、この場で祝われる過越の食事。愚かにも誰が一番偉いかと言い争っている弟子たちに囲まれながら、イエスは自分がとらえられ殺されることを見つめています。しかしイエスの心境は、決して自分の死だけに縛られず、過去、現在、未来を見渡す広い展望をもっておられました。

過去。この最後の晩餐は過越の食事でした。イスラエルの民にとって過越の食事は、神が人類と契約を結んでくださったことを記念する食事です。イエスは、奴隷状態にあったイスラエルの民を神があわれみ、自由へと解放してくださった出来事を思い起こし、神がどれほどの愛をもって働きかけてくださってきたか、そして恵みを受けてもそれを当たり前のこととして神から離れていこうとする人類の愚かさ、そうした歴史の流れを見つめていたことでしょう。だからこそイエスは、この過越の食事において、神の働きかけを受けても神から離れてきた民の歴史、契約を破ってきた歴史の歩みの中で、全く新しい一步を踏み出されます。人類が神との全く新しい関わりを始めることができるように。

現在。イエスは、過去と同時に、現在をも見つめておられました。自分が最も親しくしていた弟子たちは、相変わらず頼りなく、揺れ動いています。イエスは、そうした「今」という時を見つめ、人間の弱さ、はかなさが世の終わりまで人間の条件として続くだろうということを受け止めておられます。この現実を悲観することなく、またごまかして理想化することもなく、ありのままの世の中に、神の真実、神の愛を打ち立てようと、頼りない弟子たちに、神の真実のしるしを委ねようとされます。逮捕される自分を放り出して逃げ出し、イエスを知らないと言いつつ弟子たちを「使徒」とし、神の計画の協力者にされます。

未来。イエスはまず自分が逮捕され、殺されるだろうという目の未来を見据えておられました。しかしそれだけではなく、ご自分の死によって人類すべてに神の愛が届き、神の支配が全世界におよぶ歴史の終わり、神の国の完成をも見つめておられたのです。だからこそ、神の愛の形見を「最後の晩餐」という形でこの世に残されたのです。

「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き...」。過越の食事において、パンを取って祈るのは家の長の役割でした。「家長」つまりイエスはその食事に集まっている人々の責任者として、パンをとり、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、ひとり一人に「食べなさい」と手渡します。イエスは、そこに集まっていた弟子たちの長としてだけではなく、いわばこの世に生を受けたすべ

ての人の長として行動されます。

そして言われます。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である」と。イエスは食卓にあった平凡なパンをとって、突拍子もないことをおっしゃいました。「これは、わたしの体である」と。体といっても、物理的な血の通った肉体という意味ではありません。聖書の中で「体」というとき、「その人そのもの」を意味します。ですからイエスは、「このパンは、わたしそのものである」と言われたのです。このパンというしるしによって、わたし自身を全部、あなたがたにあげます、と宣言されました。

イエスは自分の死が迫っていることを意識していました。暴力を受け、血を流して死を迎えることをしっかりと受け止めておられました。イエスは、自分の死を現実的に受け止め、その上で、自分の死に対して意味をお与えになったのです。「この死は、あなたがたのためのものである」と。わたしたちのために、イエスは死ぬのだと宣言されました。

このようにしてイエスが祈りながらパンを弟子たちに渡したことによって、イエスの十字架上の死と最後の晩餐とが結び、最も大切な事柄となったのです。

イエスが持つておられる 10 グラムのパンが 10 グラムの肉のかたまりに変わったとすれば、不思議な自然現象が起こったということになります。イエスはそんな自然現象を起こされたわけではありません。イエスはパンに託してご自分を与えてくださったという超自然のことを言っているのです。決死の覚悟で私たちに与えられたパンは、十字架にかけられたイエスの形見、共にいてくださるキリストの働きそのもの、神の愛のあかしそのものなのです。

弟子たちは、最後の晩餐の席上では、この現実が理解できなかつたと思われまふ。どれほど重大なことをイエスがおっしゃり、なされたか、ということに気づいてはいなかつたでしょう。しかし、忘れませんでした。忘れなかつただけではなく、イエスが十字架上で息を引き取られた後、ほんの少ししかたないうちに、「週のはじめの日」ごとに、イエスが命じられたように、パンを裂く式を行うようになりました。それが、今日に至るまで続けられているエウカリスチア、感謝の祭儀、通称「ごミサ」なのです。

食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」(ルカ 13 : 20)。

イエスは、ぶどう酒の杯も同じようにして「わたしの血である」といわれます。それもあなたがたのために十字架上で流されるイエスの血であると。「あなた方のために」死ぬ。つまり、イエスのいのちは、わたしたちへの贈り物なのです。イエスの死は、愛のあかしであるということを、この最後の晩餐において宣言されたのです。

さらに驚くべき言葉がつけ加えられます。「わたしの血による新しい契約である」。

イスラエルの民は、シナイ山で神がモーセを通して契約を結んでくださったことを知っていました。旧約聖書の出エジプト記 24 章によると、モーセは雄牛の血の半分を祭壇に注ぎ、残りの半分を民にぶっかけて「これは主があなた方と結ばれる契約の血である」と言っています。しかし

旧約の契約は、人間の側の落ち度によって、たびたび踏みにじられてしまいました。イスラエルの民は、神がさしのべてくださっている手をたびたびふりほどき、神から何度も離れてしまいました。

イエスは、この古い契約の出来事を思い出させつつ、自分の十字架での死が、神が人類ともう絶対に切り離されることのない形で結ばれる全く新しい契約だと宣言されます。新しい契約は、古い契約のように破れることがない、新しい永遠の契約です。なぜならば、最初から踏みにじられた状態の中で結ばれた契約だからです。これ以上壊れる可能性のない状況の中での契約だからです。弟子たちの無理解と裏切りを踏まえた上で結ばれた契約だからです。十字架で流されるイエスの血による契約。罪人と結ばれた契約はこれ以上壊れる可能性のない契約なのです。イエスは、古い契約の記念である過越の食事を、まったく新しい人類の連帯の記念に変えてしまわれました。

「わたしの記念としてこのように行いなさい」。イエスの命令に従って、弟子たちは「週の初めの日」ごとに集まって、最後の晩餐を記念し始めました。イエスによる一世一代の晩餐を、もう絶対に取り消されることのない神の愛の形見として執り行うようになったのです。

パウロは「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」（ローマの信徒への手紙 5:8）と書いています。それは、神の愛がイエスの十字架で示された、十字架は徹底した愛による自己犠牲、奉獻だとパウロが理解したからです。主イエスの晩餐を繰り返すとき、主イエスの十字架を記念するとき、そこに神の愛が現存します。それに参加しなければ全く意味がありません。それでキリストの弟子になりたいと洗礼を受けた人々は、300年近く続いた迫害の中であっても、「週の初めの日」に集まって一つのパンを裂き、それを分けて食べることで、イエスを思い起こし、神の愛に感謝したのです。「週の初めの日」というのは、今で言ったらブルー・マンデーみたいなものです。休みの日にはありませんでした。一日働いてくたくたになっても、迫害のなかでも、命がけで集まって、イエスとともに生きていることを感謝して、「主の晩餐」を祝い続けたのです。「週の初めの日」が日曜日と呼ばれるようになったのは2世紀に入ってから、そして日曜日に仕事を休むようになったのは、迫害時代が終わり、キリスト教信者が増えていってからのことです。

こんにちでも「週の初めの日」である主日には、世界中で、イエスの晩餐を記念するエウカリスチアが捧げられ続けています。

4. エウカリスチア：パウロの理解⁹

パウロがエウカリスチアをどのように理解していたかは、コリントの教会に生じた二つの問題を激しく非難している手紙からわかります。

⁹ 4項と5項は、P.ネメシエギ「エウカリスチア」『新カトリック大事典』I pp.742-743を引用し、適宜加筆したり、省略したものである。

コリントの信徒への手紙 一 10章1-22節：兄弟たち、次のことはぜひ知っておいてほしい。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け、皆、雲の中、海の中で、モーセに属するものとなる洗礼を授けられ、皆、同じ霊的な食物を食べ、皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らが飲んだのは、自分たちに離れずについて来た霊的な岩からでしたが、この岩こそキリストだったので。しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒野で滅ぼされてしまいました。これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです。彼らが悪をむさぼったように、わたしたちが悪をむさぼることのないために。彼らの中のある者がしたように、偶像を礼拝してはいけない。「民は座って飲み食いし、立って踊り狂った」と書いてあります。彼らの中のある者がしたように、みだらなことをしないようにしよう。みだらなことをした者は、一日で二万三千人倒れて死にました。また、彼らの中のある者がしたように、キリストを試みないようにしよう。試みた者は、蛇にかまれて滅びました。彼らの中には不平を言う者がいたが、あなたがたはそのように不平を言うてはいけない。不平を言った者は、滅ぼす者に滅ぼされました。これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。わたしの愛する人たち、こういうわけですから、偶像礼拝を避けなさい。わたしはあなたがたを分別ある者と考えて話します。わたしの言うことを自分で判断しなさい。わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。肉によるイスラエルの人々のことを考えてみなさい。供え物を食べる人は、それが供えてあった祭壇とかかわる者になるのではありませんか。わたしは何を言おうとしているのか。偶像に供えられた肉が何か意味を持つということでしょうか。それとも、偶像が何か意味を持つということでしょうか。いや、わたしが言おうとしているのは、偶像に献げる供え物は、神ではなく悪霊に献げている、という点なのです。わたしは、あなたがたに悪霊の仲間になってほしくありません。主の杯と悪霊の杯の両方を飲むことはできないし、主の食卓と悪霊の食卓の両方に着くことはできません。それとも、主にねたみを起こさせるつもりなのですか。わたしたちは、主より強い者でしょうか。

コリントの教会に生じた第一の問題は、ある信者がギリシアの神々の偶像に捧げられた供え物の肉を食べる宴会に平気で加わったことでした。これをパウロは非難し、エジプトからの脱出の際にイスラエル人が神の多くの恵みを受けた後に罪を犯し、罰を受けて死んだことを思い起こさせています(1コリ10:1-22)。このような出来事が「書き伝えられているのは」、キリスト者に「警告するため」とパウロは言います。実にキリスト者は、昔のイスラエルの民に比べて遙か

に優れた恵みを受けています。キリスト者の「賛美の杯」は、「キリストの血にあずかること」であり、彼らが「裂くパン」は「キリストの体にあずかること」だからです。その「パンは一つだから」、キリスト者は皆「一つの体」、すなわち、キリストの体なのです。それゆえ「主の食卓につく」者は、異邦の神々に捧げられたいけにえの肉を食する宴会に加わってはならない、とパウロは結論づけています。

コリントの信徒への手紙 一 11章 17-27節：次のことを指示するにあたって、わたしはあなたがたをほめるわけにはいきません。あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているからです。まず第一に、あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。わたしもある程度そういうことがあろうかと思えます。あなたがたの間で、だれが適格者かはっきりするためには、仲間争いも避けられないかもしれません。それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか。それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。わたしはあなたがたに何と言ったらよいのだろう。ほめることにしようか。この点については、ほめるわけにはいきません。わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。

第二の問題は、キリスト者が「主の晩餐」のために集まった際、「互いの間に仲間割れ」が生じ、「各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいる」ということでした。この過ちを正すためにパウロは、イエスの最後の晩餐について、以前からコリントの人々に伝えていたことを繰り返し（11：23-25）、「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになる」（11：27）と警告しています。主の晩餐の意味は、「主が来られるときまで、主の死を告げ知らせる」ことにあるからです（11：26）。

パウロにとってエウカリスチアとは何よりも、復活した主イエスの死がもたらす救いの力を信者にもたらし、受けた救いにふさわしく生活する義務を彼らに負わせる儀式でした。そして、エウカリスチアにおいて裂かれたパンを食べ、賛美の杯を飲む者は、イエス自身の体と血にあずかり、キリストの一つの体である教会となるのです。

5. エウカリスチア：ヨハネ福音記者の理解

ヨハネ福音書の6章に記されている「いのちのパン」に関するイエスの説教は、最後の晩餐と密接に関係しています。特に6:53-57は、主の晩餐について説いたものだと一般的に理解されています。

ヨハネによる福音書6章51-57節： イエスは言われた。「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。(略) はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。

「まことの食べ物であり、まことの飲み物である」イエスの肉を食べ、血を飲む者は、「永遠の命」をいただきます。「生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる」という言葉は、イエスによる救いの本質を告げているものです。

ヨハネによれば、エウカリスチアを行う人々は、父なる神から遣わされて天から降って来たイエス、すなわち、受肉した神の永遠のみことば(ロゴス)であるイエスを信じて(1:14)、世のいのちのために犠牲となったこのイエスの「肉と血」(すなわち、イエス自身)を食べて飲むことによって、イエスと一致し(6:56)、御父から御子イエスを通して与えられた永遠のいのちを受け取るのである。

ここで忘れてはいけないことは、ヨハネ福音書がイエスによるパンとぶどう酒の儀式には直接触れず、代わりにイエスが弟子たちの足を洗われたという出来事を記していることです。イエスは最後の晩餐を始めるにあたってまず、弟子たちの足を洗い出したのです。舗装道路なんかなく、シャワー設備もない時代です。弟子たちの足はどろどろで臭かったにちがいません。それでペトロが「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられます。関係がなくなってしまうとまで言われます。

「この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」イエスは、弟子たちの足を洗ったあと、こうも言われました。「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。」

ヨハネ福音書によれば、実際にイエスが愛されたように愛し仕え合うことと、最後の晩餐を記念してイエスの「肉と血」を食べて飲むことは切り離すことができないものなのです。

アウグスティヌス:「聖徒らの集団の全体が普遍的な犠牲奉獻として大祭司によってささげられた。イエスは、我々が偉大な頭の体となるように、...受難の時、我々のために自分の身をささげた。...多くの者がキリストにおいて一つの体になる。これこそキリスト者の犠牲奉獻である。...この秘跡において、教会がささげる物の内に教会自身がささげられるということが示される。...教会は、頭に属する体であるから、キリストを通して自分自身をささげることを学ぶのである」(『神の国』10,6)。「信ずる者は、自分がキリストの体であることを忘れないなら、キリストの体のことをよく知っているはずである。...ああ、これこそ敬愛の秘跡、一致のしるし、愛のきずな。生命を得ようとする人は、生きる場をもっている。いのちを汲み取る源をもっている。近づきなさい。信じなさい。生かされるために、[キリストの]体に合体しなさい」(『ヨハネ福音書講話』26,13)。

エウカリスチアとは、ご「聖体」だけを指すものではありません。また「感謝の祭儀」(ごミサ)だけを指すものでもありません。エウカリスチアとは、最後の晩餐を記念することによってイエスの教えと愛を思い起こし、最後の晩餐が意味している内容を心に刻み、イエスとともに生きさせていただいていることを体験し、互いに愛し合い受け入れ合い、イエスとともに歩ませていただいている恵みに感謝すること、すべてを含んだ言葉です。

聖体拝領 「キリストの体」「アーメン」の二つの意味を大切にしていきたいものです。